

## ITビジネスプラザ武蔵 企業取材レポート

### #4 株式会社金沢エンジニアリングシステムズ

(話し手：製品企画部兼開発部 部長 小林 康博 氏)



聞き手・文：

村田 智 (IT ビジネスプラザ武蔵交流・創造推進事業運営委員会ディレクター、株式会社MONK 代表取締役)

株式会社金沢エンジニアリングシステムズ (以下、同社) は、自動車のナビゲーションシステム、液晶モニター、デジタル家電、IC カード決済端末などを中心に、ソフトウェアの受託開発事業をおこなっている企業だ。

#### 「IoT」黎明期からの取組み

いま注目を集める「IoT (アイオーティー)」(モノのインターネット)は、現在のように各種メディアで頻繁に目にする以前から、同社の主業務である受託開発においては当たり前前の技術だったようだ。そんな中で、「これからは自社製品に力を入れていく」という方向性に伴い、3年前から本格的に「IoT」という言葉を打ち出すようになったとのこと。

同社にはハードウェア開発エンジニアはおらず、ソフトウェア開発エンジニアがほとんどを占める組織となっており、特に、IoT 商品に関しては、IoT のエッジ側 (ユーザーに近い側) のデバイスをつなぐような役目を果たす「ゲートウェイ (ネットワークとネットワークの接続機能)」のソフトウェアを得意としている。エッジ側の開発は、他のいろんな企業と連携しているようで、ゲートウェイのハードウェアも、北海道の企業と連携しながら、お客様によって異なるゲートウェイの接続先や中身に応じ、同社の IoT 技術を活かしているとのことである。

#### 課題解決型のアプローチをエンジニア自ら行うのが特徴

小林さんいわく、「開発は、課題の解決を実現するためにはどうしたらいいか」というアプローチから入ることがほとんどで、全くのゼロから開発するわけではないとのこと。例えば、医療・介護施設向け監視システム「eMil-health (エミルヘルス)」は、「患者や入居者の院内での転倒などをいかに減少させるか？」という、病院や介護施設の課題を解決することがきっかけとなり生まれたものである。

一般的な企業には営業企画、開発、製造といった様々な部隊があるのに比べ、同社は百数十名の社員のうち、2名の営業部員以外はすべて、開発エンジニアであるのが大きな特色だ。そのため、時にはエンジニア自身が顧客の窓口を担当することも珍しくない。しかし、開発を得意とする一方で、企画営業やニーズを拾うことが苦手という弱みもあり、現在改善を進めている途中だそうだ。

#### 9割を超えるリピート率を誇る開発力

「顧客からリピート発注されることが圧倒的に多く、他社からの口コミや紹介による開

発の注文がほとんどです。」と胸を張る小林さん。というのも、「この案件ができるのだから、こんなこともきっと可能なのでは」と紹介されるケースが多いからだという。「ソフトウェアのことはよくわからないけど、こんなことを解決したい」という方が多く相談に訪れるそうだ。

対外的な仕事に関わる小林さんは、開発エンジニアばかりが在籍している同社においては異質な存在だと思われることが多いという。確かに、取材当日も小林さんのコミュニケーションスキルにはエンジニアらしからぬテンポの良さがあり、驚かされた。そのため、小林さんみたいなタイプの社員が多いのかと思って入社志望する方もいるが、実際入社してみると、真面目に開発するメンバーが揃い、確かな品質を担保するピラミッド構造がしっかりとできた会社だと初めてわかる。だが、今後もっと多様な人材が出てくれば、良い意味で会社が活性化されるのではないかと、ポジティブに捉えているようだ。

元々外部に開かれた雰囲気のある会社でないこともあり、地場の人たちにも十分に認知されておらず、メーカーからの受託開発がほとんどであるため、ベンチャー企業などの個人事業主が訪ねてくるといったケースはまだまだ少ないようだ。

## 黒子として日本産業を盛り上げる

受託開発は、日本の産業の下支えをしているところであるが、表舞台に出ることは少ない。特に、組み込みソフトウェアはハードウェアの中に入るものなので、例えば、メーカーの自動車は知っているが、その自動車に採用されているコンピュータがどう使われているのかは知らないし、知る必要もないといった具合だ。そういった中で、プログラムはさらに見えない部分なので、それをあえて全面的に出すことがないのは想像できる。さらには、メーカーとは NDA（秘密保持契約）を結んでいるので公表できないことも大いに関係している。

そんな背景もあり、ホームページの中身を見ても、何をしているのかわからない方が多いのではないだろうか。「これは同社が開発に携わった結果、世界一になったんですよ」と誇れるものはあっても、同社から情報のリリースはできず、隠れた部分となっている。

## アイデアコンペや異業種とのマッチングで受託開発の枠を超えたことで生まれたもの

これまでは、同社から営業するスタンスを持たずに、口コミでの開発だけだったが、リーマンショック以降、5年ほど前から営業部員を配置し、外にも目を向け出したようだ。

今は、市場的に人材の確保が難しく、いかに優秀なエンジニアを確保するかが企業の成長を左右することになる。同社がここ数年で公に打って出て事業展開をしたこともあり、採用に関しては優秀な人材に恵まれているという。素晴らしい会社に成長した半面、もっと自社製品をつくっていかうとするチャレンジ精神が社員の中にまだ足りないと、小林さんは感じているようだ。そのため、今後はチャレンジングな人材を育てて活気のある会社にしていきたいという。

具体的な取り組みとしては、年に一度、社内でアイデアコンペを開催しているそうで、そこから生まれた製品はまだ無いが、自社製品についての考え方に影響を与えつつあるものもあるとのこと。社員にとっては、これまでずっと、「受託開発の会社」という枠組みの中で働くという意識が強かった。それは安定的な会社を運営する上ではおそらく一番の根底にあるキーではあるが、その枠組みの中だけでやっていったところで、損もしなければ儲かりもしないという考えに行き着いたようだ。「もっとチャレンジングな仕事をして、みんなで幸せになっていかう」という方針を掲げ、自社製品をみんなでつくっていく流れが徐々に生まれてきて、その流れで冒頭の「ゲートウェイ」が誕生したという。

今年は「ウェアラブル元年」といわれている。注目を浴びつつあるウェアラブルの作業

システムもすでに着手されているそうだが、まだスタートしたばかりで採用事例は無いとのこと。簡易的にウェアラブルを使えるソフトウェアも開発したが、機能が限定されているためか、爆発的なヒットは得られていないのが現状だ。

## 取引先一社に依存せず、独立した企業の強みを活かす

同社ならではの大きな強みもある。独立系の企業ゆえ、一社にぶらさがっていない。そのため、様々な企業から声を掛けられ、技術が集まる仕組みになっており、その強みを活かした開発や受託ができるような環境に恵まれているといえる。現在の自社製品開発は全体の 5%程度。コンテンツを持つようとして始められたそうだが、それだとうまくいかないことがわかってきたという。「コンテンツを持つよりは本気で開発して、本気で世に問うという姿勢じゃないと難しいですね。コンテンツは受託開発業務を安定させるし、そのコンテンツを見て、受託開発が転がり込むこともある。むしろ、そういったことを自社製品として活かすことができないかと知恵を絞っています。」と、小林さん。

開発エンジニアしかいないことが一番の強みである半面、開発しかできないことは一番の弱みであるようだ。販売網や、保守点検サービスに関わる部隊を全く有していないため、それを補ってくれる他の企業と連携する必要性を常に感じているとのこと。とりわけ、組み込みソフトウェア開発という立ち位置からいくと、デバイスを制御して、クラウドに上げることが IoT では得意分野。しかし、クラウドの先にある、消費者に近い部分（ユーザーサイド）のサービスを考えるのはあまり得意ではない。

そんなことから、異業種とのマッチングが重要となっており、ニーズを持っていても実際にどう形にしているのかわからないといった異業種、特に、同社の規模と同じかそれ以上の規模で事業をされている方と、サービス側の企業、そして同社でタグを組むことが一番のポイントとなっている。実際に、サービス側の企業と組み出してから、色々な事業が動き出したようだ。

## エンジニア向け交流会を立ち上げ、ビジネス拡大を試みる

エンジニア同士の交流と組み込みビジネスを活性化させたいという思いから、「組み込みエンジニアフォーラム」という会を立ち上げて、IT ビジネスプラザ武蔵で定期開催することも試みている。何社か組み込み系のエンジニアが参加しているが、会社の数としてはもっと多いはずで、まだまだ情報をリーチできていないとのこと。運営していて、「IoT 系、組み込み系で何かをしたい」というテーマであれば、素晴らしいエンジニアが集まるが、「何かオープンイノベーションをしよう」といった漠然としたテーマでは、盛り上がりや実現性が難しいと感じているようだ。なぜなら、一企業の組み込みエンジニアは、その機器に関してはスペシャリストだが、保守的な人が多いためだ。その視野をできるだけ広げるための場として、フォーラムを立ち上げたとのことである。

「同社の場合はお客様の情報を出せないことが多い。そのため、具体的な仕事内容を話すことができない。すると、会話が盛り上がらないこともあるんです（笑）。」と小林さん。ただ、小林さんのバックに 120 人のエンジニアがいると思えば、「一緒に仕事がしたい」「仕事を取りたい」と野心がある方なら、参加に大きな意義があるといえる。

組み込みの産業そのものが「組み込みエンジニアフォーラム」を中心に広がっていけば、「あの会社に頼めば何かしてくれるかも」「あそこはいろんな会社と仕事をしていて、しかもリピート率が高い」というような口コミから、今後の開発ビジネス全体のさらなる広がりが期待できそうだ。



◆株式会社 金沢エンジニアリングシステムズ

1988年創業。ECU(エンジンコントロールユニット)、カーオーディオ、カーナビゲーション、車載バッテリー制御、液晶モニター、デジタル家電など、車や電化製品、デジタル機器の性能を支える組み込みソフトウェアや、制御系アプリケーションなどの開発を手がける。金沢を拠点に、北陸の企業のみならず、首都圏や関西のメーカーからの開発依頼が多く、高い実績を誇る。